

# 私は日本語がわからない

中 村 平 治\*

先日、地下鉄の電車に乗っていると、次の車内放送が聞こえてきました。運転者からの注意事項です。

「ドアが閉まります（足下にご注意ください）」

この注意はこれまで何度も耳にしたのですが、今回だけは、妙に気になり、聞き捨てにならないと不安になり、ペンをとった次第です。この日本語の表現法は不適切で、次のように言い改めるべきではないでしょうか。

「ドアを閉めます」

便利のため、上を「が」、下を「を」方式と呼ぶことにします。「が」方式が表現として不適切だと判定するのは、責任逃れで、卑怯な呼びかけになると思うからです。仮に、足下をドアで挟み、けがを負わせるといった事故を招いたとしたとき、「が」では犯人ないしは責任者が不問にふされるからです。この点「を」方式だと、責任の所在を明言することになるので、乗客は保障のもっていきようがはっきりし、安心して乗り・降りできます。

---

\* 福岡大学人文学部

この経緯を順を追って捕獲します。電車の運転手は当機関の最高責任者です。大学の学長、会社の社長と同格です。自分の意志次第で電車が動き始めたり、止まったりします。ドアの開閉も自由自在です。早く閉じることも、遅く開くことも手動者の意志次第です。彼は脳からの司令に応じて、然るべきボタンを押すと、ドアが動きだすのです。もちろん、動かし手の意志は、背後に控える「運転の手引き（マニュアル）」とか社長の命令に統御されているのですが、その辺の議論は外します。運転者の意志でドアの開閉が実施されると見ます。この現実を尊重すると、「ドアを閉めます」という呼びかけの方が、誠実で適切な表現になります。閉めることで、万が一、お客様の足下を挟み、ご迷惑をおかけするようでしたら、「私が責任をもって、善処します」という文脈にうまく乗っかるからです。

しかし、「ドアが閉まります」では、運転者の意志から離れた自然現象の感じを強く受けます。雨とか雪が自然の采配で雲から落ちてくるように、誰の意志によるのでもなく、「ドアが独りでに動きだす」、したがって、挟まれたら、天の仕打ちだと思い、「私のところに苦情を持ち込まないように」という文脈に納まる表現の仕方になります。「が」方式はこの含みになるという理由で卑怯な言い回しだと私は思うのです。

それぞれの表現法の特徴を掴むため、他の例を加えてみます。

#### 「が」方式

「雨が降ってきた」

「火事が起きた」

「花子が泣いた」

「ツバメが飛び去った」

#### 「を」方式

「消毒液を散布した」

「火を燃やした」

「花子を泣かせた」

「鶏を追っ払った」

上の例は、後者に「意図的な意志」が読み取れ、前者にそれが無く、何か別の動因が作用していることが了解されます。「意志」が働くということは、その後にも責任の手が伸びるということです。「私の意志で液を庭に撒いたので、お宅の洗濯物に臭いが付着したかもしれません。もしそうなら弁償します」といった責任感が感じられます。しかし、この表現法を「が」方式に言い換えるとどうなるでしょう。「消毒液が降ってきた」と言ったら、臭い付着の責任を負わなくて済みます。自分の責任ではなく、天の仕業になるからです。

他の例についても同じことが言えます。火の用心を十分にしなかったので、隣家の物置き小屋が焼けたとします。このとき「私が火を燃やしたので」と「を」方式の言い方をすると、原因の責任者が明確になり、弁償を余儀なくされます。一方「火事が起きて」と「が」方式の言い方をすると、例えば落雷があり、それが元で火事になったということになり、誰の責任でもなくなります。

これが論理の住みわけです。責任の所在が、自然発火ではなく、人為的なものであることがはっきりしているとき、「火事が起きて」と言った「が」方式の表現をすると、その小屋の持ち主から、責任転嫁するのは卑怯だと罵られるでしょう。

次の「花子を泣かせた」も同じで、例えば抱っこしていた人形を取り上げたことが原因であれば、人為性が明白で、花子の母親から睨み付けられ、奪った人形を返さねばなりません。他の原因で、例えば雷がゴロゴロ鳴ったことが引き金であれば、母親は犯人の指しようがなく、泣き寝入りせざるをえません。この場合も、泣かせるという意思が明確であるにも関わらず、「花子が泣いた」

と言った「が」方式の言い方をすると、自分の罪を他に譲り渡すことになりません。

このように考察すると、2通りの方式はそれぞれ固定した文脈とのみうまく合体することがわかってきます。「が」方式は損害の償いをする必要がありませんが、「を」方式はそれをせざるをえません。償うのを忌避しようとして、「が」に切り替えると、売国奴呼ばわりされるかもしれません。

このように考えを煮詰めると、私が初めに主張したことが分かっていると思います。つまり「ドアを閉めます」が責任のある適切な呼びかけで、「ドアが閉まります」は卑怯で不適切な間違った言い方です、と私は信じているのですが、同じ間違った注意の呼びかけが今でも依然として繰り返されています。明日も、明後日も繰り返されるでしょう。これが現実なのです。

「が」方式を不適切と判定する私の見解に対して、どちらも同じようなものではないかと反発されるかもしれません。当呼びかけの重点は注意を促す、つまり「足下にご注意ください」と喚起することによって、この前置きは、理由の添加にしかすぎないのであって、「が」も「を」も等しくこの傘下に納まる、これが大義であるので、違いはその中の小差でしかないと、意見されるかもしれません。

言われる通り、小差でしかないと見るのが常識というものでしょう。現に、この呼びかけを耳にして、運転手は卑怯だ、責任のがれをしていると目くじらを立てる乗客は誰もいないからです。私が妙に不安になったのは、虫の居所が悪かったからでしょう。要は、その「小差」を外側から見下すか、内側から見上げるかの、つまり感受性の問題だと思います。

ところで、「が」と「を」一括論にも一理あることに私はここで気づきました。「が」が、次の例に見るように、「責任感」を意図する文脈とうまく結びつく例があるからです。次の場面は、太郎が食卓の向こう側に置いてある醤油瓶を取ろうとして、手前の水の入ったコップを転倒させたところです。どちらの

表現がより一般的でしょうか。

(1) あっ、水をこぼした、すいません。

(2) あっ、水がこぼれた、すいません。

この判定は微妙になると思いますが、私は(2)に旗を挙げますが、いかがでしょうか。「が」方式を優先させると、私は当初の主張を見直さねばならなくなります。その前に類する例を加えておきます。受け入れ易いように( )内に文脈を添えます。

(野球の練習をしていると、ボールが飛んでいき)

「お宅の窓ガラスが割れました」

(申し訳ありませんでした)

(一生懸命、勉強したのですが)

「成績が上がらず、不合格になりました」

(済みませんでした)

「が」方式は自然現象で、仕手には作為性が特に認められない旨、前に説きました。人為性がなければ、誰の責任でもなく、謝罪を入れる必要はないのですが、上の例に感じられるように、うまく納まっています。「が」の言い方が「済みません」と整合しています。ところが、前に言及したように、「火事が起きて、済みませんでした」の場合は落ちつかなくなります。「火を燃やしたのですが、後始末が十分でなく、お宅の小屋を燃やしてしまいました、申し訳ありませんでした」と、即ち「を」方式に言い直すと安定します。この整合性の違いはどう説明したらいいのでしょうか。

(5)

「が」方式に2通りあると見ます。一つは、作為性を感じさせる「謝罪」と整合性があり、もう一つはそれが無い場合とに分けられます。これが判明すると、説明したことになります。ここで比較しやすいように、例文を再度挙げます。

- (2) 水がこぼれまして、済みませんでした。
- (3) \*火事が起きまして、済みませんでした。

文頭の\*印は表現が不自然、不当であることを示します。同じ「が」方式であるのに、どこが違っているのでしょうか。

(3)の方がなぜ、落ちつかなくなるのでしょうか。

それは、同じ形式を踏んでいても(2)は人為性の影が背後に読み取れるのに対して、(3)にはそれが認められないからです。(2)と同様、前の「窓ガラスが割れた」にも「成績が上がらなかった」にも、仕手の意志が感じられます。「水がこぼれた」のは意図的に「こぼそう」としたからではありません。偶然に身体の一部が水の入ったコップに接触したためです。しかし、そうだとすると、転倒の予測はできたと考えられます。用心深い人であれば、転倒は防げたかもしれません。慎重に醤油瓶に手を伸ばしていたなら、水をこぼさずに済んだでしょう。ここに先程言った「人為性の影」が読み取れるのです。厳しい見方をすると、「こぼすべくして、こぼれた」と言えなくもないでしょう。「水がこぼれた」は「雨が降った」に全く窺えなかった意図性を感じさせるのです。同じ「が」方式でもこの点が違うのです。そしてこの違いが(2)と(3)の正・否を分けるのです。

類する推理は「野球のボールで窓ガラスが割れた」にも当てはまります。この場合も、用心して、ガラスに当たらないようにしてボールをバットで跳ね返していたら、防げたかもしれないのです。ガラスに当たるべくして、当たった

とも言えるのです。人為性の影が察知できます。この存在が「火事が起きた」とたもとを分けているのです。

「水がこぼれた」「ガラスが割れた」「成績が上がらなかった」などには人為性の影が認められる分だけ、正当な表現に近づくと観察されます。同じ「が」構文でも、「火事が起きて、済みません」にそれが認められない分だけ、不当な表現のままにとどまるのです。このように思考を巡らすと、論頭に掲げた「ドアが閉まります」の不適性が確実なものになります。

ゴールのテープを切る前にもう一言、側面を固めておきます。それは、なぜ日本語が「が」方式に片寄る傾向にあるのかと言う現実です。これへの傾斜が「ドアを閉めます」でなく「ドアが閉まります」を選択させたのだと考えられるからです。

問題の表現を形式的に捕らえると、「名詞」＋「動詞」になります。これら2つの要素を組み合わせるとき、連結詞（助詞）が入用になります。このとき受けて立つのが、「が」であり「を」です。一方では「ドアが閉まる」が、もう一方では「ドアを閉める」が具現化されます。それぞれ「名詞（主語）＋＋自動詞」と「名詞（目的語）＋を＋他動詞」という構造に支えられています。これまでに挙げた例文を当てると、「花子が泣いた」と「花子を泣かせた」、「水がこぼれた」と「水をこぼした」、「成績が上がった」と「成績を上げた」などが該当します。

もう少し、例を加えると「花が咲く」と「花を咲かす」、「雨が降る」と「雨を降らす」、「花卉が落ちる」と「花卉を落とす」、「独楽が回る」と「独楽を回す」などがあります。

これらの事例から左と右の表現の特徴を指摘すると、人為性が「ない」－「ある」ではないでしょうか。「ドアが閉まる」とか「独楽が回る」には自然に、あるいは独りでに事件が生起するといった含みを感じ取れるのですが、「ドアを閉める」とか「独楽を回す」には意図的な人為性が濃厚に読み取れるのです。

事件ないしは動作の結果そのものは双方共に同じですが、そこに至るまでの経路が違ってきます。

この解説と関連して、森羅万象を言葉で表現するとき、「人」と「天」のどちらを主役に抜擢するか、という大問題があります。人間の作為を表面にださか、また自然の采配を主軸に据えるかという表現選択の問題とっていいでしょう。

大きく打ち出しますが、前者への傾きが顕著なのが「英語」で、後者へのそれが「日本語」だとよく言われます。自然に対する見方が日本人と西洋人で異なっているのです。自然を恐れ、ありのまま拝受しようというのが我々の思想であり、自然を切り開き、人間の都合に合わせてしようというのが彼らのものの考え方です。

この違いは、造園にも認められます。日本の庭は自然を生かしますが、西洋の庭は人工的に整理整頓されます。

ここで、造園術と争点の「ドアが閉まります」とどう関わっているのかと、待ったが掛けられるかもしれませんが、もう少しお立ち会い願いたい。

言葉による表現に沿って話を進めますが、日本語は己を後退させ、他者また自然を表に立てようとするところがあります。本来的には「私」の意志また意図が強く働いているにも関わらず、その人為性を希薄化し、自己を消滅させることで、自分を遠慮させようという算段です。

この現象は、例えば「・・・することになりました」という結びの表現に現れます。点線を埋めて見ましょう。

「私たちはこの度、結婚することになりました」

「次の住所に引っ越すことになりました」

「お祝いをする運びと相成りました」



上の表現がいかに遠慮した言い回しであるかは、次の表現と比べてみると、明らかになります。

「私たちはこの度、結婚しました」

「次の住所に引越しました」

「お祝いをします」

両表現化の違いは自明でしょうが、蛇足ながら添えると、次のようになるでしょう。それぞれの出来事（行為）の成就に当たり、上の方には主役者の人為性が薄いが、下の方はそれが濃いということです。上は他者の働きが強く、その強引さに押し切られて、やむなく「結婚しました」、私たちの厚かましさを成立したのではありませんと、遠慮がちに訴えているように響きます。

一方、下の表現は自分たちの積極的な作為でそうなったという響きがします。他者の顔が引っ込んでいて、自分の顔が出ています。

次の「引っ越し」には、実際的に、もっと人為性の発動があったと考えられます。新居には多額の費用がかかるだけに、並たいていの覚悟では実現できないはずで、引っ越しに際しては最高の意志が働いているのです。この積極性を考慮すると、上のように「・・・することになりました」とひとごとのように言えない筈です。「皆様のお陰で」といった自己後退の遠慮した言い方になっています。これは事実全く相反する表現法です。にもかかわらず、下の「引っ越しました」より好まれるのです。ここに、つまり、自分をへりくだらせるところに日本人の謙虚な国民性が窺えます。

日本人が、真実に逆らっても、己を後退させる民族であることをもう少し証明しておきます。争点の「ドアが閉まります」の不適切性に繋げるためです。

日本人の自己消去が端的に現れるのは、文字通り「私（主語）」抜きの設定が徹底していることでしょう。この徹底振りには英語の対応表現と比べてみれば

すぐに判明します。例えば、英語の “I am glad to see you.” は、日本語では「お目にかかれてうれしいです」といった具合に、主語無しで表わすのが常道です。もし「私は」を先頭に置くと、出しゃばりの印象を与えます。

この点で、私が喚起したいのは、主語（私）の省略がいつも、謙虚だということ、いい印象を身邊に与えるのかという疑問です。この場合も文脈によりけりです。次の例を考えてみましょう。どちらが、聞き手にいい印象を与えるでしょう。

「私が悪うございました」

「悪うございました」

「私が勝ちました」

「勝ちました」

私はペアの上と下を買います。何か悪いことをしたときは「私」は省かない方が正々堂々としていて、爽やかさを感じさせますが、省くと悪事を回避しているように感じられるからです。「私」がある場合とない場合とでは、責任の引き受けの度合いが違います。あると、犯人が明白になりますが、ないと犯人が不明瞭になります。もし聞き手が犯人を特定化しようとしているとすると、どちらの言い方が好ましいか、いい印象を与えるかは言うまでもないでしょう。

しかし、何か良いことをしたときは、「私」が勝ったんですよと「私」を設定しない方が奥ゆかしいと思います。省きただ単に小声で「勝ちました」と報告する方が、謙虚で聞き手に好印象を与えるのではないのでしょうか。

したがって、「私（主語）」を省くのは、確かに、謙遜の表明になりますが、文脈によりけりだという現実を承知しておくべきでしょう。何か他人に羨ましがられるようなことをするとき、自分を後退させ、他者を立てる方が、逆に

何か悪事を働くときは自分が率先して責任をかぶるべく脚光を浴び、他者はたとえ責任の一端を担っているとしても、後退させる方が、それぞれ好印象を与えるのではないのでしょうか。この位置づけは次の表現にも当てはまります。

「この度、受賞することになりました」

「この度、受賞しました」

「この度、私は受賞しました」

「私は失敗をしでかしました」

「失敗をしでかしました」

「失敗をしでかすことになりました」

それぞれのペアは上の方が聞き手にいい印象を与えたいと思いますが、いかがでしょうか。ここでの重点は、悪事の責任者は端的に明示すべきだということです。

結論を小出しにしますが、この観点が渦中の「ドアが閉まります」にも当てはまると思うのです。運転手の誤算で早めに閉め、乗客に怪我を負わせる、つまり悪事を働くかもしれないという文脈で使われています。ならば、今言った論法でいくと、責任者の明示が必須になります。ここで登場するのが私の言う「ドアを閉めます」という表現です。「が」方式と「を」方式の優劣を決めるには今一議論が必要のようです。

電車の運転手が他のアナウンスをすると想定してみます。問題の「ドアが閉まります」と比較するためです。場面は、電車が某駅に停車することになっているのに、間違ってしまったことに対する、乗客への詫のアナウンスとします。次の表現のどれが適切でしょうか。

「某駅を通過しました、申し訳ありません」

「私の不注意で某駅を通過しました、申し訳ありません」

「信号の見落としで某駅を通過しました」

乗客にしてみれば、中段の表現が好ましいでしょう。責任の所在が明確に打ち出されているからです。この点、上段は他者の命令で自分の意志に反して停車しなかったとも解釈されます。下段は自分のうっかりミスとも取れますが、他の原因（例えば信号の故障）でも、受けとめられます。責任転嫁の意図がなくはないとも解釈されます。その証にこの文にだけ「詫び」が添えられています。

他の場面を参照してみます。今度は財布の落とし物がとどけられていることの呼びかけです。次のどれが好ましいと聞き取れるでしょうか。

「財布を落とした方は、車掌が気づかっていますので、取りに来てください」

「財布の届けものがあります、心当たりの方は、お知らせください」

「財布が落ちていました、受け取りに車掌のところまで来てください」

好・悪の判定をする前に、上の文とすぐ上の文との文脈の違いに触れておきますが、出来事（行為）が乗客に、不利益と利益をもたらす場合に分けられます。一方は不利に働くから責任の所在を明示するほどに好ましくなるのであり、一方は有利に、つまり自分が称賛されるような快挙にでるので、そういう場合は下手にまた後退させる方が聞き手により好ましい印象を与えることになるのです。この点で、中段の文が最適です。上段は乗客に取りに来いといっているので横柄であり、下段は横柄ではなくても、運転手を中心に相手を直接的に動かそうとしています。この点、中段は出来事の快挙を他者に移しており、対処

の仕方が間接的な呼びかけになっています。

もう一例、争点の文に近づけますが、何らかの事情で電車が急停車を余儀なくされるとします。このとき、次の2通りの文が想定されます。

「電車が止まります」

「電車を止めます」

ここに言う「が」方式と「を」方式の文が可能です。どちらが好ましいか、より適切であるかは文脈次第です。文脈をでたらめに添えてみましょう。

（停電です）電車が止まります。

（停電です）電車を止めます。

（気分が悪くなりましたので）電車が止まります。

（気分が悪くなりましたので）電車を止めます。

判定は素文の性質に左右されます。「止める」には運転手の意志が働いており、「止まる」にはそれが働いていないで、何か別の采配が顔を出しています。したがって、この原理を頭におくと、自ずから、文脈との整合性が判明します。送電がストップするのは運転手の責任ではないし、一方気分が悪くなるのは、昨夜、酒を飲み過ぎ、寝不足だからです。つまり運転手の心掛けが悪いからです。自分が悪いのに、いかにも他者のせいにするような「止まる」という表現化は矛盾しているだけでなく、卑怯です。

ここで詰めの態勢に入ります。電車の扉の圧縮が原因で園児が重症を負ったとします。そんなことは起こりえないとどこからか聞こえてきそうですが、仮にとします。最近、ホテルの回転扉が元で人命が落とされたことだし、完全に起こりえないとも言えないでしょう。運転手が警察で尋問を受けます。このと

き次のどれが適切な応答になるでしょうか。

(確認しないで) ドアを閉めました。

(早めに) ドアが閉まりました。

(確認しないで) ドアが閉まりました。

(早めに) ドアを閉めました。

私は最上段が一番誠実な応答の仕方だと思いますが、いかがでしょうか。「閉める」という行為にこそ人為性と責任の所在が明示されるからです。そうすると最下段も快方に向かいますが、「早めに」だと責任感が「確認しないで」に比べやや遠のきます。「発車のベルが故障のためかいつまでも鳴らなかったの・・・」といった言いわけにも取れるからです。これ以上は感覚の問題でしょうが、私には「確認しないで」という表現に責任感の確かさを認めます。中段の「閉まりました」はこれまで重ね重ね言及してきたことから、問題にならないでしょう。

\* \* \* \* \*

以上の推論で冒頭の主張、即ち「ドアが閉まります」という注意の仕方は不適切で、「ドアを閉めます」に言い改めるべきだという論旨につながるのですが、しかし、私の理論と実際にアナウンスされている呼び掛けの間には空白があります。私の推論に説得力があるなら、すぐにでも「を」方式に変更されるとみられるのですが、実践はそのままの状態が続くでしょう。私が「替えろ」とわめき叫んでも、電車屋さんは「考えておきましょう」と逃げるでしょう。空白ないしは溝がいつまでも続くのです。この空白地帯が私に「日本語がわからない」と言わせるのです。

日本語について、私は次の疑問を持ちます。答えられないので、空白が埋まりません。

（１）私の推論が正当だとしても、日本語の大勢が、主役後退の「が」を採用する傾向にあることから、多少横道にそれていても「長いものには巻かれろ」に従っておいた方が無難である—といった見解が横行しているとすると、私は腑に落ちません。表現というものは、たとえ慣用的なものでも、よりよく気持ちを伝えるために常時、言い改めを施すべきだと考えるからです。これは正論だと思いますが、なぜ施す努力をこの場合もしないのでしょうか。

（２）「ドアが閉まる」というアナウンスは本当に責任逃れかもしれません。私は「ドアを閉める」と意図的に言わなかったのであるから、文句を言いたければ、上司に取り合ってくれ—と開き直られるかもしれません。もしこのようなことを予測して、運転手が乗客に呼びかけているのだとすれば、未恐ろしいことです。「ドアが閉まる」の背後に自己優遇への伏線があるとしたら、私は理解に苦しみます。日本語を放り出したくなります。

（３）日常の言葉遣いはもともと大雑把にできあがっている、問題の「が」「を」を細かく峻別しようとするのも神経質すぎる—という意見が強いとすれば、そしてこれに妥協するとすれば、私のほうから何をかいわんやです。「ドアが閉まる」と「ドアを閉める」の違いが気になるから提起した論及ですから。